

への集積が良好な 6 例中 4 例は MR 以上を示した。

まとめ 動注リザーバーより ^{99m}Tc -MAA を注入した肝への分布と治療効果は関連がみられ、これが不均等な場合はカテ位置の変更や血行変更術を行う必要があると思われた。

13. 糖尿病患者に対する血清ミオシン測定の実臨床的意義の検討

西巻 博 石井 勝巳 依田 一重
(北里大・放)

今回われわれは、糖尿病患者において血清中の心筋ミオシン軽鎖 I (以下、ミオシン) を測定し、潜在的な心筋障害の有無について検討した。本院内科外来を受診した糖尿病患者のうち無作為抽出された 53 例のうち、腎機能が正常の 42 例について、血清ミオシン値と血清 CPK 値、臨床経過を比較検討した。血清ミオシン値が高値を示していたのは、42 例中 7 例 (16.7%) であり、このうち血清 CPK 値の高値を認めたのは 2 例であった。臨床経過では 7 例中 2 例に虚血性心疾患の既往がみられた。

糖尿病患者について血清ミオシン値を測定することは臨床的に有意義であり、今後も経過観察して検討する必要があると思われた。

14. 下肢浮腫に対するリンパシンチグラムによる経過観察

鈴木 孝成 横内 順一 石井 巖
松田 裕道 黒田 真奈 井上 真吾
若林ゆかり 阿部 公彦 網野 三郎
(東京医大・放)
新井 久之 (東京医大・老)

リンパ浮腫に対するリンパシンチグラムはリンパ管造影と比較して、手技的に容易で、重篤な合併症を引き起こすこともなく、最近その重要性は増している。われわれは、複数回リンパシンチグラムを施行した 10 例について、治療前後の変化や経時的な変化について検討を加えた。

対象は、下肢浮腫のある 14-65 歳の男性 5 例、女性 5 例で、リンパ浮腫の成因としては、一次性 4 例、二次性 6 例であった。経過観察期間は、15 日から 4 年である。使用医薬品は、 ^{99m}Tc -rhenium colloid または ^{99m}Tc -

HSA である。

経時的な変化を比較した結果は、不変 3 例、悪化 5 例、改善 2 例であり、リンパ管の描出、鼠径リンパ節の描出、Dermal back flow などのリンパシンチグラム上の所見と、臨床症状はほぼ一致した。治療の指針として、リンパ浮腫の経過を観察するのに有用と考えられる。

15. 悪性膀胱褐色細胞腫の 1 治療例

町田 豊平 (慈恵医大・泌)
川上 憲司 森 豊 (同・放)

症例は 31 歳、男性。排尿痛と肉眼的血尿を主訴に 1988 年 8 月、当院入院。膀胱鏡検査で膀胱内に充実性の腫瘤を認め、生検にて組織学的に膀胱褐色細胞腫と診断された。既往に何度か排尿時失神を経験していた。内分泌学的検査で血中ノルアドレナリンの異常高値を示し、 ^{131}I -MIBG シンチグラフィで膀胱部にのみ異常集積像を認めた。1988 年 9 月、膀胱全摘、リンパ節郭清および尿路変更を行った。病理組織学的診断は、両側腸骨リンパ節転移を伴った膀胱褐色細胞腫であった。

^{131}I -MIBG シンチグラフィは、褐色細胞腫の局在診断に優れており、また治療への応用が期待される。

16. 前立腺癌マーカー PA, γSm , PAP 同時測定の実臨床的有用性

町田 豊平 上田 正山 木戸 晃
(慈恵医大・泌)

未治療前立腺癌 66 例、前立腺肥大症 130 例で PA, γSm , PAP を測定し、前立腺癌の腫瘍マーカーとしての臨床的有用性について検討した。未治療前立腺癌 66 例の血清 PA, γSm , PAP 値の陽性率はそれぞれ 77%, 83%, 57% で、 γSm が最も高かった。病期別陽性率は全 Stage で γSm の陽性率が高く、次いで PA であった。PAP 陽性で PA および γSm が陰性例の例は認めず、3 マーカーとも病期の進行に伴い高値を示す傾向が見られた。細胞分化度別の陽性率は 3 マーカーとも、高分化型と比較し、中、低分化型で陽性率が高い傾向が見られた。PA, γSm , PAP 同時測定で、3 マーカーとも陽性例は 37 例 53%, 2 マーカーでは 14 例 22%, 1 マーカーでは 5 例 8% であった。Sensitivity, Specificity, Efficiency はそれぞれ PA は 77%, 82%, 63%, γSm は 83%, 59%,

49%, PAPでは57%, 91%, 51%で, Sensitivityでは γ Smが最も優れるが, SpecificityはPAPが勝り, EfficiencyはPAが優れていた。

17. 前立腺癌の経過観察における骨スキャンと PAP 測定の価値

相澤 卓 松本 哲夫 間宮 良美
三木 誠 (東京医大・泌)

抗男性ホルモン療法を中心として治療した過去5年間の前立腺癌87例のうち, 骨シンチグラフィを2回以上実施し, かつPAP・RIAでも経過を追跡できたのは30症例である。

これらの例で一定期間の前後で骨シンチを対比できる単位(2回実施は1単位, 3回実施は2単位とし)について, 骨シンチとPAP値を対比検討した。

PAPの変動と骨シンチの変化が一致したのは, 50単位中27単位54%であった。しかし, PAPの変動が1~2か月で10 ng/ml以上あったものに限定すると, 骨シンチの変化との一致率は70.6%で認められた。特に短期間に10 ng/ml以上PAP値が上昇した場合はすべて骨シンチも悪化していた。いわゆるflare phenomenonはわずか3.3%でみられたのみであった。

前立腺癌の経過観察に当っては, PAPなどの腫瘍マーカーを1~2か月ごとに検査し, それが急上昇した時または強い臨床症状が出たときのみシンチグラフィを実施すればよい。

18. 骨シンチグラフィにおける肋骨の早期骨転移所見の検討

養島 聡 岡田 淳一 有水 昇
(千葉大・放)

19. 髄芽細胞腫患者における骨シンチグラフィ

小須田 茂 鎌田 憲子 鈴木 謙三
(都立駒込病院・放)

Medulloblastomaは小児小脳虫部に好発する未分化腫瘍であるが, 骨転移例に遭遇することはまれである。最近, 3例のMedulloblastoma患者に骨シンチを施行し, 2例に異常集積を認めた。1例はいわゆるsuper bone

scanを示し, レントゲン写真上, びまん性の造骨性変化を認めた。

Medulloblastomaに対する各種治療法の進歩により, 患者の生存率は向上している。長期生存例に頭蓋外転移の生じる危険性が高いとすると, 骨転移が最も高頻度であり, 患者の経過観察に骨シンチは有用と考えられた。

20. MFHに対する ^{67}Ga シンチグラフィの有用性について

太田 洋 尾崎 裕 雨宮 謙
竹内 信良 白形 彰宏 玉本 文彦
住 幸治 片山 仁

(順天堂浦安病院・放)

malignant fibrous histiocytoma(以下MFH)は, 中年の四肢および後腹膜に好発する軟部組織由来の悪性腫瘍である。今回, 手術および培養で病理学的にMFHと診断された5例について, ^{67}Ga シンチグラフィの有用性を各種画像診断と比較検討した。MFHは, その病理組織像の多彩さを反映して, 画像診断の所見も多彩で決め手となる所見に乏しかった。その中で, ^{67}Ga シンチグラフィは, これのみで質的診断は困難なものの4例中3例で集積しており, 特に病巣の広がりや治療後の経過観察に有用であると思われた。

21. 仙骨 chordoma 3 症例の骨シンチ・Ga シンチ

小野 慈 (神奈川県立がんせ・核)
櫛田 和義 (同・整外)
猪狩 秀則 (横浜市大・放)

chordomaは胎生期の脊索の遺残から発生する悪性の骨腫瘍であるが, 発症頻度の低いことも関係して, 核医学的所見の報告は少ない。最近3年間に3例のchordomaを経験したので骨シンチ, Gaシンチを中心に報告した。

全例男性, 年齢は54歳, 63歳, 86歳。初診時の腫瘍の大きさはおおの17×15×14, 7×7×5, 15×15×13 cmを示した。骨シンチでは腫瘍自体への集積は乏しく63歳例では正常骨より低く, いわゆるcoldを呈していた。Gaシンチでは腫瘍の集積性は低く86歳例ではcoldを示した。骨盤内に腫瘍は発育するため腸管内Gaの残存は増加し, 圧迫, 偏位の同定が必要となった。骨シン